SY1-4

虐待された子どもの情緒行動問題

小杉 恵

大阪府立母子保健総合医療センター 子どものこころの診療科

子ども虐待は、子どもの成長や発達にさまざまな影響を及ぼす。その影響は生涯に渡るだけではな く。次世代にまで続いてしまう可能性もある長期的なものである。子ども時代の虐待体験が、のちに 成人になった時の精神障害のリスクであることは以前から認識されていることであるが、精神面のみ ならず、身体面への影響も大きく、適切にケアされないまま成長すると、早すぎる死にもつながるこ とが近年明らかにされてきた。虐待を受けて育った子どもたちは、一般的に不安感が高く、自信や自 尊心の低下、抑うつ、引きこもり、敵意や攻撃性などの情緒的な問題を示すことが多い。学齢期にな ると、落ち着きのなさ、衝動性など注意欠如多動性障害と類似した状態もしばしば認められ、さらに 万引きや対人暴力などの反社会的行動が見られる。思春期以降では自殺念慮、自殺企図、自傷などの 自殺関連行動や、過食、性的逸脱行動、アルコールや覚せい剤の物質乱用など、より深刻な行動上の 問題が持続し、専門的な治療を要することも多くなる。演者はこれまで、医療機関や行政機関で虐待 を受けた子どもたちと出会ってきた。幼いころに出会った子どもたちが思春期、成人期を迎え、中に は今度は母親となって再度出会うことになった子どももいる。虐待的な環境から保護され、入所施設 で暮らすようになると、規則正しい生活と栄養管理された食事、安全な環境の中で、入所時は非常に 小柄でやせっぽちの子どもが、標準の身長と体重になることは珍しいことではない。安定した生活の 中で学習の機会を得ることで、数年後には認知能力もキャッチアップし、知的障害域であった知能指 数が標準になった子もいる。環境の力で取り戻すことのできた、子ども本来の力である。一方で、施 設環境という集団生活の中で多動や衝動性、対人暴力が激しくなり、行動上の問題の治療のために病 院の受診につながる子どもたちも多い。子どもたちはみな診察室では穏やかに過ごし、刺激の少ない、 大人の多い環境では落ち着くことが出来る。子どもたちの環境からの影響の大きさを受診の際に養育 者である施設職員と共有することも、医療者の大きな役割である。子どもたちの情緒行動上の問題改 善のために、そして健康的に大人として社会参加してもらうために、治療や支援として何ができるの か、養育の現場で現在取り組まれていることや医学心理学的な視点も含めて考えたい。